

【研究ノート】

ウデヘ語における中国語借用の一側面

—チョウセンニンジン関係語彙を中心に—

津 曲 敏 郎

1. はじめに：ウデヘとその言語の概況

ウデヘ (Udehe, Udihe, Udege; 自称 *udie* から) はロシア沿海州およびハバロフスク州に住むツングース系少数民族である。本稿では筆者の調査で得られたウデヘの筆記資料から中国語の借用状況を紹介し、特にチョウセンニンジン採集にまつわる記述と語彙に注目したい。

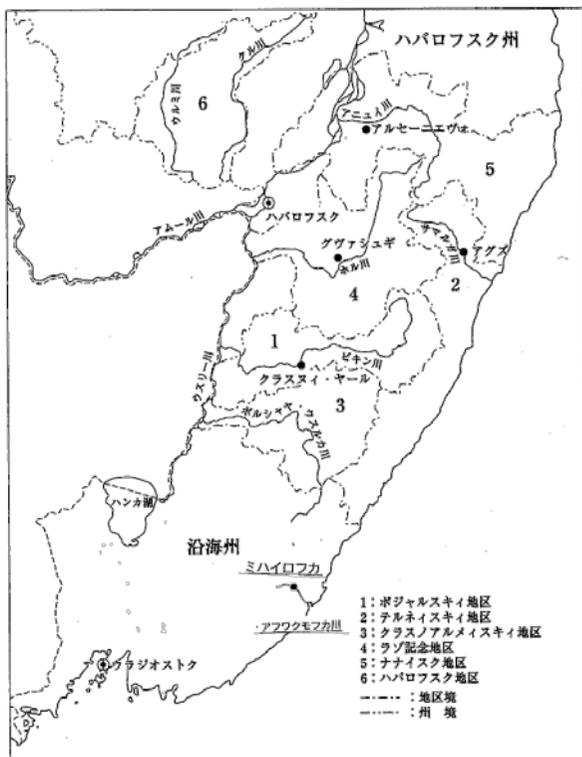
間宮林蔵は『東韃地方紀行』巻上のなかでキヤッカラ (ケヤッカラ) という名称にふれ、「地名なり、朝鮮界の地方」(洞・谷澤 編注 1988: 237) と言及しているが、これはウデヘを指すものと見られている (オロチ語 *kiaka* 「ウデヘ」、ウリチャ語 *kiakali* 「オロチ」等参照: Cincius et al. ed. 1975: 391)。ウデヘ語で *kia* は「鷲」を意味し、この語がキヤルンジガ *Kjalundzjuga* などのかたちで氏族名としても取り入れられている (cf. 満州語 *kiyakūha* 「雑種の鷹」、*giyahūn* 「鷹」)。

キヤッカラについて乾隆年間の『皇清職貢図』には次のような記述がある (洞・谷澤 編注 1988: 237-238; 下線および () 内のピンイン表記は引用者):

恰哈拉は渾春沿東海及富応・岳色等の河に散処す。男女俱に鼻傍に於いて環を穿ち、寸許の銀銅人を綴りて飾りとなす。男は鹿皮をもって冠をつくり、布衣跣足、婦女は則ち披髪にして笄せず、而して襟・衽の間に多繡紋を刺す。その屋廬・舟船ともに樺皮を用う。俗、網罟を知らず、また魚射猟をもって生となす。性、遊惰にして蓄積なし。土語はこれを恰哈拉 (*qiahala*) 話という。歳に貂皮を進む。

下線部について、以下で紹介する自伝テキスト中にも、不猟続きの父のために母が銀の人形のお守りを作ったというエピソードが記載されている (カンチュガ/津曲訳 2001: 123)。

さて今日、ウデヘはホル川流域のグワシュギ、ビキン川流域のクラスヌイ・ヤールなどに比較的まとまったかたちで分布している (地図参照)。人口は 2000 人 (1989 年)、うち 26% (520 人) ほどが



地図 ウデヘ族主要居住地 (森本 1998:3 に加筆)

ウデヘ語母語話者とされるが、今日、話者実数は 100 名以下と見られ (Nikolaeva & Tolskaya 2001: 1)、その言語は消滅の危機に瀕している。1930 年代、他のソ連少数民族言語とならんでローマ字による書記法が試みられたが、ウデヘ語では定着には至らなかった (のちにロシア字化されて今日に至っている言語も多い)。近年、新たなロシア字書記法による教科書 (Kjalundzjuga 1999) などを使って、限られた範囲でウデヘ語教育も行われているが、日常の言語としてロシア語が常態化しているなかで、書きことばとしての実用化にはほど遠い。

ウデヘ語の研究としては、Shnejder 1936 の辞書と簡略な文法記述が長いあいだ唯一のものであったが、近年になってようやく Kormushin 1998 (辞書、文法、テキスト)、Simonov 1998 (テキスト)、風間 1998 (文法概略)、Girfanova 2001 (辞書)、Nikolaeva & Tolskaya 2001 (英文による詳細な文法)、Nikolaeva, Perekhval'skaya & Tolskaya 2003 (テキスト、CD 付き)、風間 2004 (テキスト、CD 付き) 風間 2006 (テキスト) など、内外の研究成果と資料が利用できるようになってきている。

2. ウデヘ(語)による 20 世紀前半の生活史

筆者は 1996 年以来、ビキン川中流域のクラスヌィ・ヤール村を訪れ、A. A. カンチュガ Aleksandr Aleksandrovich Kanchuga (1934-) 氏によるウデヘ語・ロシア語の自伝対訳資料 (図 1 参照) の整理・分析・刊行に取り組んでいる。第 1 部として書かれた「少年時代」篇は日本語訳 (カンチュガ/津曲訳 2001)、ウデヘ語・日本語対訳版 (カンチュガ/津曲編訳 2002)、さらにウデヘ語・ロシア語版 (Kanchuga/Tsumagari ed. 2003) 等のかたちで刊行した。ここには 20 世紀前半のウデヘの生活が、生業 (漁労、狩猟、採集、農業)、社会と家族、学校、戦争中の暮らし等に渡って精細に描写され、民族自身が記録した民族誌・生活史として貴重である。本稿では特に中国との関係を示す記述について取り上げる。なお本資料の背景・経緯について津曲 2001、精神文化の記述をとりあげたものとして津曲 2002 も参照。氏の自伝はその後、第 2 部「青年時代」、第 3 部「学生時代」、第 4 部「妻ファヤの思い出」までがウデヘ語・ロシア語版のかたちで刊行されている (Kanchuga/Tsumagari ed. 2005, 2006a, 2006b)。

3. 中国との関係の記述例

本資料の著者カンチュガ氏が 3 歳のとき、一家は氏の生まれ故郷カヤルから下流へくだったメタヘザへ引っ越した。新居はかつて中国人が住んでいた家だったという (以下 [] 内は原文のウデヘ語表記とその借用元、イタリックは中国語ピンイン表記、Ma. 満州語) :

(1) こうして新しい家での生活が始まった。家のそばにはジャガイモ [tuduze <土豆子tudouzi] や豆 [tuli <Ma. turi]、トウガラシ [laziou <辣椒lajiao]、カブラ [manziaŋa <蔓菁manjing]、トウモロコシ [boulimi <包(儿)米bao(r)mi] が植わっていた。だれが植えたのか、私はいつも不思議に思っていた。あとでだれの家だったのか、わかった。中国人の家だったのだ。彼の名前はワンシリ [wan'sili <王喜礼wang xiliなど]。ほかの中国人と共に中国へ退去させられたのだ。1937 年のことだった。両親はコルホーズに入ってこの家をもらったのだ。だから私たちはカヤルからこのメタヘザへ引っ越したというわけだ。毎朝、父と母は鍬 [cutu <锄头chutou] を持ってコルホーズの菜園を耕しに行った [cana-na-a-ti <铲chan-接尾辞-過去-3 複]。(カンチュガ/津曲訳 2001: 2-3 ; 訳文の一部改変、中国語は敖特根其其格 2005 を参照)

追放前の中国人の足跡が、農作物はじめ農業に関わる分野での中国語借用語にも色濃く現れて

いる。

いっぽう、父の世代には匪賊というかたちでの中国人がウデへの人々に脅威を与えていたことが、父の語る次のエピソードからうかがえる：

(2) 子供の頃、匪賊 [хунхузе <红胡子 honghuzi, ロシア語にも хунхуз として入る] のやつらがライフル銃を構えてビキン川沿いにやって来た。ウデへたちはばらばらに離れて住んでいたので、自分たちの身を守ることができなかった。彼らは長兄レシंगाの妻を奪って行った。われわれは舟で上流に逃れた。秋にまた彼らがやって来て、薄氷の浮かぶ川を舟で下流へ送るよう要求した。兄のグリナが送って行ったが、途中で舟が転覆して二人の中国人が溺れ死んだ。グリナは逃げて帰って来た。父 [= 筆者の祖父] はこれを知ると、レシंगाをホルの親戚キモンコの所へ遣った [母がキモンコの出だったので、そこへ一家で身を寄せて中国人の報復を逃れようと考えて、兄を先に派遣したのだ]。冬になった。匪賊は結局やって来なかったが、家族は冬中タイガに身を隠していた。雪解けとともにカテン峠を越えてホルへ向かった。カテンでは大人たちが木をくりぬいて舟を作った。3日ばかりで3艘作った。女、子供、それに家財も多かったので、3艘の舟が一杯になった。そこから舟でキモンコの所へ下った。母がキモンコの娘だったのだ。(カンチュガ / 津曲訳 2001: 16)

<p>⑤. Ово утава елишэ, каски хунхузи, лэсирэвэ, минти за садрэ Килмонковичи. Турчиссэ. Хунхузэриэ эсиртэвэ элэ. Сэло ту эли кай дилэрүелэшу эу рега зэрэ. Эли. Мила край-бэсисси, зэрэ урманшэшу Хунхузи-ка- дэвэлишэ. Калы. Э инэлишэ, саунадиэ жанава усилэти. М. сава анава дэти. М. сава мэришэ хуауэти. Мунуэуэ эдэи лэдиэ бэсисси. Антадиэ, м. саунадиэ, дунуэуэ. М. сава ала манги эдэ эли. Урмани эсиртэ пу Килмонко буалишэ Ово мамасани бэсисси. Урмани эли мунуэуэ, саунадиэ эу лэсирэвэ уалишэ. К. мунуэуэ эдэ эу элишэ, хуауэуэ али тади э. бэсисси элиэ. Антадиэ н. м. сава дэдишэ, дунуэуэ м. саунадиэ, саунадиэ тадишэ. Урмани эли м. сава лэсирэвэ. Н. сава кади али дэдишэ, мунуэуэ.</p>	<p>Дедэ, узнав об отом, поисал дэсиртэ на ху и рэдэлишэ манги Килмон Настуриса Зилла. Хунхузи не прихо дил. Мы не все за ли в тайге прижились. Как только растая ли снег, мы тоже ушли на хуауэ через перевал на Катэн. Добрались до Камона, взрос. мы стали добывать баты. Трёх сделали за три дня. нас было много. Женщины, дети были. Три бат малых загрузили. Оттуда мы спу стились до Камонки. Жена дэди бэсис дэвэушэи из Килмонко. Рослав Присхав к нам, узнали что лэсиртэ э. бэсисси. Ушли К. мунуэуэ, таде эсиртэ хунхузи не при жились. Женщины с готовились выехать ли, Камонки головки, три бат. Как они скор по лэсиртэ. Он был са м. был старший из нас.</p>
--	---

図1 カンチュガ自筆ノート (IV: 5) [本稿 3(2)の一部]

4. 中国語の影響

ウデへ語に対して中国語が少なからぬ影響を及ぼしていたことは上の引用にも現れているが、敖特根其其格 (2005) は上記自伝対訳資料 (カンチュガ/津曲 編訳 2002) をもとに 90 ほどの中国語借用語を指摘している。それによると農業・日用品・親族などの名詞を中心に、動詞 (一部はそのまま語幹として)、副詞 (xai 「まだ、また」 <还 *hai*)、句 (xaulie 「いいか?」 <好了 *haole*) の借用も見られる。句借用としては、さらに asasa 「ありがとう」 (<谢谢 *xiexie*?) が他のツングース諸語には見られないウデへ語独特の形であることからみて、借用の可能性が考えられる (Girfanova 2001: 40 も参照)

中国語の影響は語彙にとどまらず、ウデへ語の音韻・文法面にも及んでいると見ることができる。直接的な影響に加えて、中国語の類型的特徴との類似を示すような現象が見られ、その中には影響関係を仮定できるものがあるかもしれない。たとえばウデへ語では語中の r, k, s 等の子音がある種の条件下で消失した結果、単音節化した語 (や語幹) が見られる (以下、Ma. 満州語、Mo. モンゴル語、Na. ナーナイ語) : 例 wai 「20」 <Ma. orin ; ai 「酒」 <*arakī (Ma. arki) <Mo. ; waikta 「星」 <*xosikta (Na. xosikta, Ma. usiha (cf. アルセーニエフ 1995: 下 118 ウイクタ *uikta*, 津曲 2003)。また上掲 3 (1) の cana-na- 「耕しに行く」において動詞語幹 cana- (<铲 *chan*) が動詞化接尾辞を含んでいないとすれば (-na 「～しに行く」はふつう動詞語幹に付く)、これは中国語動詞を語幹としてそのまま借用していることになる (他の類例として下記 fajsas- 「チョウセンニンジンを探す」 <访查 *fangcha* ; その他、敖特根其其格 2005: 167 の例も参照)。山越 (2005: 195) はシネヘン・ブリヤート語におけるこうした中国語からの動詞語幹の直接借用を「孤立語」的タイプへの類型的変化として注目している。

言語接触による影響の最たるものは言語そのものの取替えであろう。ウデへに関しては「ターズ (韃子)」の言語取替えが知られており、その現況を風間・ポドマスキン (2002) が報告している。それによると、沿海州ミハイロフカ地区 (地図参照) に約 100 名のターズという集団がおり、うち 50 代以上がロシア語とのバイリンガルのかたちで中国語 (山東方言に類似した方言) を話すという。ターズの背景に関する記述 (Belikov & Perehvar'skaja 「ターズ語」解説の一部) を風間・ポドマスキン (2002: 68-70) によって引用する :

V. K. Arsen'ev はターズを「漢民族化した」ウデへ、すなわち中国式家屋に定住し、農業に従事し、その本来の母語をほとんど失ったウデへとして特徴づけた。…[中略]…沿海州にロシア人が到来した時期には、すでにウスリー沿いおよび南沿海州の先住民たちは 2 言語使用の状況にあった。すなわち本来の母語であるウデへ語もしくはナーナイ語のほかには皆漢語を実地にあやつることができた。この地域のロシアへの編入以後も、漢民族による現地の住民への言語的・文化的影響は少しも衰えなかった。1910 年における沿海州地域の、季節労働者を除く漢民族男性の定住者の人口は、6 万 1400 人で、他方当時のナーナイ人の人口はせいぜい 1 万人強であり、ウデへは 3000 人強であった。この際に多くの漢人たちが先住民の集落の間に住むようになったが、中国政府が漢民族の女性に対しロシアへの渡航を禁じたために、彼らはナーナイやウデへの女性を妻にめとった。このような状況下での漢民族の言語的および文化的影響はかなりのものであった。……ウデへ語とナーナイ語の日常的な語彙への漢語の影響はきわめて重大なものである。ビキンにおける年配のウデへとナーナイのうち、かなりの者が、またイマンのウデへは今でも程度の差はあれ漢語をあやつることができる。……1930 年代の中ごろ、ソ連からの大量の外国人国外追放が始まったが、1936 年から、極東でも中国および朝鮮国籍の住人が追放されるようになった。漢民族とともに漢語を話すターズも追放され始めた。しかしターズは独自の民族であると主張する V. K. Arsen'ev の説明のおかげで、一部の

ターズは追放を免れることになった。

5. チョウセンニンジン採集に関する記述と語彙

ここでは沿海州地方における特色ある生業活動として、チョウセンニンジン採集にかかわる記述と、そこに見られる、中国語借用語を豊富に含む語彙を取り上げてみたい。まずカンチュガ自伝資料（第1部）中の記述から、関連部分を要約で示す：

- (1) 父親が子どものころ、大量のニンジンを見つけて、ナーナイ人に騙し取られそうになりながらも、ビキンの仲買人に売り、親族一同で数万ルーブルの大金を得た。(カンチュガ／津曲訳 2001: 23-25)
- (2) 父に連れられて兄と森でニンジン探しをするが、半月歩いて何も見つからなかった。(同上 98-101)
- (3) タイガで野営中、父から聞いたニンジン掘りの若者の伝説：昔、ある若者が毎年、村の男たちとニンジン探しに出かけるが、自分には見つからない。夢で白髪の老人が現れて、お告げを聞く。言うとおりの場所に出かけると、湖のほとりでニンジンを見つける。人の形をした根だった。それを仲買の満洲人に見せると、鞆一杯の金貨で買い取ってくれた。無欲な若者は金の大半を村人に与え、残った金で美しい嫁をもらい、たくさんの子どもを育てて幸せに暮らした。カンチュガ一族はその子孫だという。(同上 158-161, カンチュガ／津曲 編訳 2004, Tsumagari 2003)

チョウセンニンジンはきわめて得がたいものであるが、一攫千金も実際にありえたこと、さらにそこから神格化や伝説化の対象にもなったことがわかる。

カンチュガ氏からは、チョウセンニンジン採集に関して次のような語彙が得られた (Girfanova 2001: 391 も参照)：

- olondo 「チョウセンニンジン」 <Ma. orhoda
- fajsa- 「チョウセンニンジンを探す」 <访査 *fangcha*
- denjeize 「葉柄が3本のニンジン」 <灯台子 *dengtaizi* (以下、図2参照)
- sepie 「葉柄が4本のニンジン」 <四枇叶 *sipiye*
- upie 「葉柄が5本のニンジン」 <五枇叶 *wupie*
- liupie 「葉柄が6本のニンジン」 <六枇叶 *liupiyie*
- santai 「根元から3本茎の分かれたニンジン」 <三台 *santai*

上例中、チョウセンニンジンそのものの呼称 *olondo* 以外はすべて中国語借用語である。ちなみにこの語のもととなった満州語 *orhoda* は *orho* 「草」と *da* 「首領、頭目」の複合語であり、それが中国語に意識されてチョウセンニンジン (中国語では単に「人參 *renshen*」) のことを「百草之王 *baicao zhi wang*」とも呼ぶという (新華網 News 黒龍江頻道のインターネット記事による；上記「灯台子」「四枇叶」等の漢字表記もこれによる)。なお満州語 *da* には「根本」の意もあるが、このことからすると「首領」の意に解すべきであろう (満州語で「根」は *fulehe*)。

fajsa- のもととなった中国語については、访査 *fangcha* 「捜査する」(敖特根其其格 2005: 172) 以外にも翻茬 *fancha* 等が考えられる。この語は本来「作物を収穫した後、その土地を耕すこと」を意味するが (小学館『中日辞典』)、東北地方の方言では「探し回ること」も意味するという (北海道大学文学部留学生 池瑶氏による)

また山中でニンジンを見つけたとき、儀式的に次のようなことばを交わすという。ほぼ中

国語そのままである：

- Baŋcui! 「ニンジンだ！」 <棒槌 *baŋchui*
- Seme baŋcui? 「どんなニンジンだ？」 <什么棒槌 *shenme baŋchui*
- Sepie! Iudise! 「4本葉だ、たくさんあるぞ！」 <四枇叶，有得是 *sipiye, youdeshi*

このうち *baŋcui* はニンジンを見つけたときの叫び声として、またはニンジンそのものを指して、ナーナイ語ビキン方言 (*baŋsu~baŋcoi* : Cincius et al. ed. 1975: 72) や朝鮮語北部方言でも使われる (小倉 1944: 上 343、下 376)。アルセーニエフ描くところの「デルス・ウザーラ」もこの語を用いている (アルセーニエフ 1995: 上 204, 下 288 ; 津曲 2003 も参照)。もとの中国語「棒槌」は本来「(洗濯用の) たたき棒、きぬた」の意から方言的に「朝鮮ニンジンの俗称」を表わすという (小学館『中日辞典』)。

なお上と同じやり取りがウデヘ語でもなされたことを示すような情報もある (下記引用中で「四枚葉の」とあるのは、もちろん正確には「葉柄が4本の」である)：

人参を見つけたら例えば次のように叫ぶという。 *olondowo ba'ami*. 「人参をみつけたよ」。それに対してさらに次のように続けて会話がなされることもあるという。 *jama olondo*. 「どんな人参だ」。 *dii gaaxi olondo*. 「四枚葉の人参だ」。 *aja, aja*. 「よし、よし」。 (風間 2006: 157)

またカンチュガ氏自身が子どものころニンジンを見つけて、上記のようなやり取りを交わしたという記述もある：

私の目の前には、4つに枝分かれしたチョウセンニンジンが赤い実をつけて立っていた。何という幸運だろう！ 初めてのチョウセンニンジンとその匂いによって見つけるとは！ 私は近づき、手にとってみると、葉や実はそれほど大きくなかった。大声で叫んでみた。しかし皆どこかへ行ってしまい、だれからも返事がない。どこへ消えたのだろうか？ “Baŋcui! Baŋcui! Baŋcui!” ともう一度叫んでみた。どこか遠くで父とエフレムがこれに応えた。リョーワとクリムはどこへ行ったのか、現れない。少し後に父とエフレム、リョーワとクリムがやって来た。彼らはここへ来る途中で会ったようだ。私の叫びに父が応えた。“Seme baŋcui?” “Sepie”と私は応えた。こうして昔ながらのやり方で中国語を使って叫び合った。ロシア人、ウデヘ人、中国人やその他の人々も同じような方法で叫んだ。(Kanchuga 2006b: 96/225 から訳出)

ちなみに 20 世紀前半、朝鮮北部における採集業者の様子とその隠語について、小倉 (1944: 下 286-296, 373-379, 上 343-344) が報告している：

慈城・厚昌・江界の三郡は山地に野生する人参の山地として有名であり、これが採取を業とする者に関しても他の地方に見るを得ざる特異の風習が存して居る。…[中略]…入山の季節は八九月頃であるが、入山に当ってはかれらは予め齋戒沐浴して邪念を払い、幾回にも亘って山神を祀るのである。……かくてかれらは食料を携えて入山する。中には一日にしてよく数本の人参を発見する果報者もあるが、中には数週間山中をさまよいながら、幾許の収穫もなくして帰宅する悲運者もある。かれらの収穫した人参は多くは支那人に、また一部は道内及び郡内に於て売却されるが、江界郡管内に於ける一両年前の総売上年額は約一萬五六千円に達して居る。一本の人参が時として数百金を値することもあるので、時には一攫千金の幸運に見舞われるものもあるが、一方それらの資産を横領せんとして幾度かの惨劇が各所に繰返されたということである。かれらが入山するに当っては、できるだけ日常使用の朝鮮語を避け、一種の隠語を使用する。それはかれらが互に人参の所在を隠

蔽し、或は収穫高を漏洩すまじと警戒する意味合いからではなく、普通の朝鮮語を使用することは、人参の自生する霊域をけがし、人参の収穫を減少せしめるといった一種の信仰に基くものである。随ってこの種の隠語はかれらの間に共通に解せられるのみならず、それが採取業者以外に伝えられても一向差支ないものなのである。私は採取業者から直接この種の隠語を聴取して七十余語を得た。(小倉 1944: 下 286-287)

これら隠語のうち 6 語が漢語起源、10 語ほどが満州語起源とされている (同 296)。

このほかチョウセンニンジン採集に関する記述・言及として、バイコフ (1995: 62-73)、加藤 (1989: 59-60)、風間・ポドマスキン (2002: 86, 122) 等がある。

付記 本稿は満族史研究会第 20 回大会 (2005 年 5 月 21 日、函館市公民館) での口頭発表「ウデへの記した生活史：中国との関係を例に」をもとに、加筆修正を加えたものである。

参考文献

教特根其其格

2005. 「ウデヘ語の漢語借用語について」. 津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語』12 : 165-174, 北海道大学大学院文学研究科.

アルセーニエフ, V. K. / 長谷川四郎 (訳)

1995. 『デルスー・ウザーラ』上・下. 河出書房新社 (河出文庫).

バイコフ, N. A. / 中田 甫 (訳)

1995. 『バイコフの森：北満洲の密林物語』. 集英社.

Cincius, V. I. et al. (eds.)

1975. *Sravnitel'nyj slovar' tunguso-man'chzhurskix jazykov*: Tom. I. Leningrad: Nauka.

Girfanova, A. X.

2001. *Slovar' udejskogo jazyka*. Sankt-Peterburg: Nauka.

洞 富雄・谷澤尚一 (編注) (間宮林蔵 述 / 村上貞助 編)

1988. 『東韃地方紀行他』. 平凡社 (東洋文庫 484).

煎本 孝 (編著)

2002. 『東北アジア諸民族の文化動態』. 札幌：北海道大学図書刊行会.

カンチュガ, A. / 津曲敏郎 (訳)

2001. 『ビキン川のほとりで：沿海州ウデヘ人の少年時代』. 札幌：北海道大学図書刊行会.

カンチュガ, A. / 津曲敏郎 (編訳)

2002. 『ウデヘ語自伝テキスト』 (ELPR A2-019, CD 付き). 吹田：大阪学院大学情報学部.

2004. 『ウデへの二つの昔話』. 札幌：かりん舎. [CD 版もあり]

Kanchuga, A. A./Tsumagari, T. (ed.)

2003, 2005, 2006a, 2006b. *Bagdise xokto telujuni (Avtobiograficeskaja povest' dlja chtenija po udejskomu jazyku) : 1 Detsvo (2003), 2 Junost' (2005), 3 Studencheskie gody (2006a), 4 Faja (2006b)*. Sapporo: Graduate School of Letters, Hokkaido University.

加藤九祚

1989. 『ユーラシア野帳』. 恒文社.

風間伸次郎

1998. 「ウデヘ語とその語りにみる狩猟・自然観」. 佐藤 (編) 1998: 318-285.

2004. 『ウデヘ語テキスト』 (全 2 冊). 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, (B) 北海道大学大学院文学研究科 (CD 付き).

2006. 『ウデヘ語テキスト 2』. (A) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

風間伸次郎, V. V. ポドマスキン

2002. 「ターズの言語と文化」. 煎本 (編著) 2002: 67-130.

Kjalundzjuga, V. T.

1999. *Udie kejeveni on'oiti*. Xabarovsk: Xabarovskoe knizhnoe izdatel'stvo.

Kormushin, I. V.

1998. *Udyxejskij jazyk*. Moskva: Nauka.

森本和男

1998. 「クラスヌィ・ヤールとビキン川流域の調査」. 佐藤 (編) 1998:1-41.

Nikolaeva, I. & M. Tolskaya

2001. *A grammar of Udihe*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Nikolaeva, I., E. Perekhval'skaya, and M. Tolskaya

2003. *Udeghe texts*. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University (ELPR A2-025, with a CD).

小倉進平

1944. 『朝鮮語方言の研究』上・下. 岩波書店.

佐藤宏之 (編)

1998. 『ロシア狩猟文化誌』. 慶友社.

Shnejder, E. R.

1936. *Kratkij udejsko-russkij slovar'*. Moskva/Leningrad: Gosudarstvennoe uchebno-pedagogicheskoe izdatel'stvo.

Simonov, M. D. (ed.)

1998. *Fol'klor udegejcev: nimanku, telungu, exe*. Novosibirsk: Nauka sibirskoe predpriatie RAN (with a CD).

津曲敏郎

2001. 「ウデへの自分史との出会い」. 『アークティック・サークル：北海道立北方民族博物館友の会・季刊誌』41: 12-14, 網走：北方文化振興協会.

2002. 「ウデへの精神文化断章：自伝テキストから」. 煎本 (編著) 2002: 39-65.

2003. 「デルス・ウザーラの言語をめぐって」. 『*Altai Hakpo* アルタイ学報』13: 61-76, 韓国アルタイ学会.

Tsumagari, T.

2003. Two Udehe folktale texts with grammatical analysis. *The Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, 61:43-73, Tokyo.

山越康裕

2005. 「シネヘン・ブリヤート語の借用に見られる諸特徴について」. 津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語』12: 185-205, 北海道大学大学院文学研究科.

参考ホームページ

新華網 News 黒龍江頻道

2005. 「“百草之王”、人參 (2005-08-22)」 http://www.hlj.xinhua.org/lytd/2005-08/22/content_4946235.htm
(閲覧日 2006/12/07)

(つまがり・としろう／北海道大学)

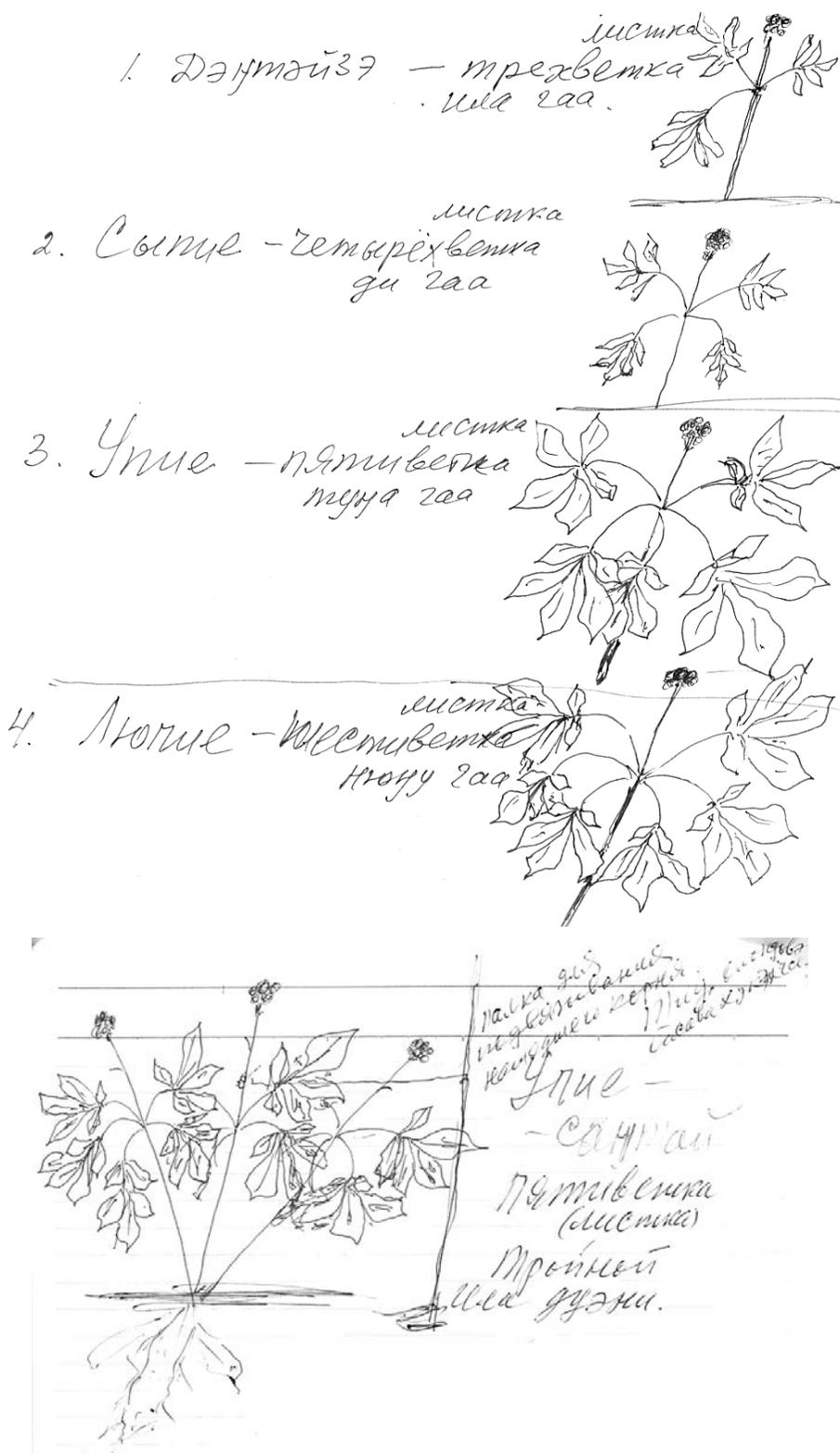


図2 カンチュガ自筆スケッチ (2003年9月)